『たけくらべ』題名考

――『たけくらべ』研究稿・第二章――

橋本　威

一　『伊勢物語』第二十三段との関係

樋口一葉『たけくらべ』の題名は、一般に、『伊勢物語』第二十三段の贈答歌に由来すると説明されている。例えば、次の如き具合である。

「たけくらべ」という題名は、早くから指摘されてきたように、『伊勢物語』（筒井筒の段）の、「筒井筒ゐ筒にかけしまろがたけ／おひにけらしなあひ見ざるまに」と、「くらべこし振わけ髪も肩すぎぬ／君ならずして誰かあぐべき」の、二つの歌をふまえてつけられたもので、工夫の凝らされた、しかも内容にふさわしい題名といえる。

（松坂俊夫『樋口一葉研究』）[注1]

親切にも、「男」の贈歌の「たけ」と「女」の返歌の「くらべ」とに傍点を打って示した解説も多い。[注2]

一葉が『伊勢物語』の内容に精通していたらしいことは、樋口家に一葉筆写の『伊勢物語　全』と『伊勢物語』所収の『日本文学全書第一』（明23、博文館）とがあったこと[注3]からでも想像出来る。特に、第二十三段に関して言えば、一葉は、早くも、明治二十一年四月、「幼年契恋」と題する次の和歌を詠んでいる。

いはけなきふり分がミに契りつる／其ことの葉はかへじとぞおもふ[注4]

小説作品に於いても、次の如き表現は、『伊勢物語』第二十三段と関連を有するものである。

○隔ては中垣の建仁寺にゆづりて汲かはす庭井の水の交はりの底きよく深く軒場に咲く梅一木に両家の春を見せて薫りも分ち合ふ中村園田と呼ぶ宿あり　（『闇桜』上）

○契りし人は竹村の茂雄とて振わけ髪のむかしより筒井づゝたけくらべ合ひし中なりしが　（未完成小説断片、作品11『春雨のふる夜に』Ⅳ）

○いひなづけの約成立しはお高がみどりの振分髪をお烟草盆にゆひ初むる頃なりしとか、　（『別れ霜』㈠）

○あはれ短き契りかな井筒にかけし丈くらべ振わけ髪のかみならねば

（『別れ霜』（十三））

○筒井づゝの昔もふるけれど、振わけ髪のをさなだちより馴れて、

（『花ごもり』（一））

右のうち、まず『春雨のふる夜に』が注目される。ここに見える「たけくらべ合ひし」は、「背丈ヲ比べ合ッタ」意で、一語の名詞に熟合はしていないが、一葉が「たけくらべ」という言葉を使用した最初の例である。しかも、序詞的用法の「筒井づゝ」に下接して用いられている。

この未完成小説は、一葉の日記によれば、次の事情で試みられたものである。

半井うしを午後よりとふ（中略）むさし野巻末にのすべきもの少し斗不足なれば何にもあれ明午後までに作り給てよなどの給はす　雨少しこぼれ来ぬればいそぎかへる　直に著作にかゝる　文章一扁（マヽ）草さんとて也　今宵雨いとつよくふる　二時頃まで机辺にあり　（「日記」明25・3・23）

「むさし野」とは、「武蔵野」第一編である。一葉は、そこに、『伊勢物語』第二十三段とも関わる発想の『闇桜』[注5]を掲載する予定になって居り、そして、それは発刊寸前であった。[注6]半井桃水に突如追加作品の執筆を依頼された一葉は、急場凌ぎに、『闇桜』と同様、『伊勢物語』第二十三段に関わる作品を企図し、そこから「たけくらべ」云々の言葉が浮かんで来たのである。尤も、翌日（明25・3・24）の日記に「文章あまりおもしろからねば春雨を詠ずる長歌になす」とあり、その「長歌」も、結局は「武蔵野」第一編に掲載されなかった。[注7]

『春雨のふる夜に』の「たけくらべ」云々から程なく、一葉は、前掲の通りに、『別れ霜』（十三）で名詞「丈くらべ」を用いている。

「たけくらべ」という語が『伊勢物語』第二十三段との関わりで一葉の脳裡に浮かんだことは、疑えない。だとしても、それは、贈歌の「たけ」と返歌の「くらべ」とを合して新造したというような事情にあったのであろうか。

このことに関し、山根賢吉氏は、「たけくらべ」の異称を持つ文正年間の『四十二の物あらそひ』について考察された上、次の通りに結論付けられた。

「たけくらべ」なる語は、一葉の造語と言うよりは、かなり古くから存したらしいことがうかがわれるのである。

（山根賢吉『樋口一葉の文学』[注8]）

野口碩氏も亦、『樋口一葉全集　第一巻』[注9]の『たけくらべ』［補注］に、次の通りに記して居られる。

「たけくらべ」は一葉が『伊勢物語』の歌から合成した造語ではない。この用語は中世以来の古い歴史をもっている。御伽草子の『猫の草紙』、文正年間の『四十二の物争』、近世の人情本『松竹梅壺前栽多気競（たけくらべ）』などに見る多くの語例は、子供の遊戯や大人の癡愚な世界を背景として、さまざまな競争を表現している。

確かに、「たけくらべ」なる語は、中世後半には既に定着していた用語だったと言える。近世直前に刊行された『日葡辞書』にも「Taqecurabe」と収録されて居り、『邦訳日葡辞書』(注10)には、その意が次の通りに記されている。

どちらがせいが高いかを見るために並ぶこと。(記号省略)
また、比喩。力、能力、学問などを試すこと、あるいは、比較すること。

『大日本国語辞典』(注11)『改修言泉』(注12)『大言海』(注13)『岩波古語辞典』(注14)『日本国語大辞典』(注15)には、一般用語として、『沙石集』一ノ三、『玉塵抄』三、『曽我物語』八、『猫の草子』、『竹斎』上、『俳諧新選』の用例が見える他、〈連歌用語〉として、『初心求詠集』、『中華若木詩抄』下、〈謡曲用語〉として、『舞正語磨』上・下、『わらんべ草』二の用例も挙げられている。

「たけくらべ」という題語は、明らかに一葉の新造語ではない。従って、一葉に、「たけ」と「くらべ」とを合するという面倒な作業を行う必要は、全くなかった。一葉の脳裡には、『伊勢物語』第二十三段の内容から、自然に「たけくらべ」という語が浮かんで来た筈である。頭の働きの実際として、そうでなければならぬ。そして、それは、『たけくらべ』執筆時より遥かに前の、『春雨のふる夜に』や『別れ霜』を執筆した明治二十五年に於いてであった。『たけくらべ』は、それを題名として利用したに過ぎない。

(注)

1 「一葉小説の題名の典拠と方法」章、八七頁。昭45、教育出版センター。

2 主なものを記すと、関良一『たけくらべ/十三夜要解』(昭31、有精堂出版株式会社)、次田潤『評釈一葉名作集』(昭32、明治書院)、和田芳恵編『近代文学鑑賞講座3 樋口一葉』(昭33、角川書店)の和田芳恵「本文および作品鑑賞」、伊藤整他編『鑑賞と研究=現代日本文学講座/小説1=近代文学の曙』(昭37、三省堂)の「作家・作品の鑑賞と研究」編「樋口一葉」章(関良一執筆)、青木一男『たけくらべ』(昭37、評論社)、関良一『樋口一葉 考証と試論』(昭45、有精堂出版株式会社)の「『たけくらべ』鑑賞」章、青木一男解説『たけくらべ・十三夜ほか』(昭和45、評論社)伊狩章「たけくらべ」—「解釈と鑑賞」昭49・11、松坂俊夫編『鑑賞日本現代文学② 樋口一葉』(昭57、角川書店)の松坂俊夫「本文および作品鑑賞」。

3 藤井公明「樋口則義、一葉の蔵書」—「一葉 一葉全集月報第七号」(昭31・6、筑摩書房)による。なお、塩田良平『樋口一葉研究 増補改訂版』(昭43増補改訂、中央公論社)は、妹邦子筆写の『伊勢物語』のあったことも伝えている(一六一頁)。

4 塩田良平・和田芳恵・樋口悦編『樋口一葉全集 第四巻(上)』(昭56、筑摩書房)所収「詠草19(百首歌・当座)第二次歌集」の「恋百首」、45。

5 但し、『闇桜』の筋の展開は、寧ろ第四十五段による所が多い。拙論「続・一葉『闇桜』論のために」—「梅花女子大学文学部紀要22」(昭62・12)参照。

6 「武蔵野」第一編の発行年月日は「明治二十五年三月二十三日」となっているが、実際はやや遅延した。「日記」明25・3・27に「小説雑誌むさ

し野出版になりたりとて一本をあたへらる」とある。

7 その原稿も伝わっていない。

8 「『たけくらべ』私考」章、一〇四～一〇五頁。昭51、桜楓社。

9 塩田良平・和田芳恵・樋口悦編、昭49、筑摩書房、四七六頁。

10 土井忠生・森田武・長南実編訳、昭55、岩波書店、六一二頁。

11 上田万年・松井簡治編、大6、冨山房・金港堂出版株式会社。

12 落合直文編・芳賀矢一改修、大10改修、大倉書店。

13 大槻文彦編、昭9、冨山房。

14 大野晋・佐竹昭広・前田金五郎編、昭49、岩波書店。

15 日本国語大辞典刊行会編、昭50、小学館。

二　題意について

「たけくらべ」なる語は、『伊勢物語』第二十三段との関わりで一葉の脳裡に浮かんだ語ではあったが、『伊勢物語』第二十三段の内容が『たけくらべ』の内容に合致するのは、かなり拡大解釈しても、せいぜい次の冒頭部分だけである。

昔田舎わたらひしける人の子ども、井のもとに出でゝ遊びけるを、成人(おとな)になりたけ(ママ)れば、男も女もはぢかはしてありけれど、男ハこの女をこそ得めとおもひ、女もこの男をこそと思ひつゝ、(注1)

一葉は、『たけくらべ』（一）～（三）、（四）～（六）執筆と同時期の、明治二十八年一、二月に執筆を試みた未完成小説断片、作品20『遠山鳥』に、いわば『伊勢物語』第二十三段とは逆の結末を、次の通りに記している。

かき根一重の隔てもなきおさな(ママ)達(ママ)より、馴れて睦つれて遊び友達の中よきが、末は雛段に押並ぶ殿様奥様ともならるゝものならず、（Ⅱ）

〈幼馴染〉という点は目を瞑るとして、『たけくらべ』は、『遠山鳥』と同様、寧ろ対立する形に於いて『伊勢物語』第二十三段と関わっているのである。山田有策氏は、『闇桜』の解説に、「『伊勢物語』ではハッピーエンドで終るが、それを少女の死で終る悲恋に染めかえている」(注3)と述べて居られるが、『たけくらべ』も亦同様に、「悲恋に染めかえている」ことになる。

そして、もし『伊勢物語』第二十三段との関連で『たけくらべ』の題意を求めるとすれば、故関良一氏の、次の如き解釈が導き出されることになろうか。

「雛鶏」という題では、子どもを主人公としていることは表わせても、その「春のめざめ」とか、一葉に本来的な「幼馴染の恋」とかいう主題は、充分には表わせない。そこで改めて「たけくらべ」の題が選ばれたのだろう。(注4)

「春のめざめ」や「恋」については一応扨て措くとして、右の御見解に対しては、『たけくらべ』の登場人物達の間――就中美登利と信如、或るいは美登利と正太郎の間に、「幼馴染」の関係が存在するのだろうかという疑念を、懐かずには居られない。

抑々、「年はやうやう数への十四、」（八）の美登利は、「生国は紀州、」（三）から、一体何歳の時に上京して来たというのであろうか。

今が「全盛」（三）の美登利の姉大巻は、「三年の馴染」（七）云々とあり、娼妓になって少なくとも三年は経ている。斎藤真一氏によれば、「明治の法では、十六歳から娼妓の鑑札を受けられた」[注5]そうなので、十六歳から三年経っていると仮定すると、この時点で、大巻は、美登利と五歳違いの十九歳ということになる。斎藤氏は亦、「明治四十四年の統計でみると二二〇三名の遊女のうち、一番多いのが二十一歳、」[注6]とも記して居られる。「一番多い」とは、全盛の年齢を示すものとも考えられる。そこで、大巻を二十一歳と仮定すれば、美登利とは七歳違いということになる。尤も、明治三十三年五月二十四日に娼妓の許可年齢が十八歳に引き上げられているから[注7]、〈十六歳時代〉の全盛年齢は、矢張りそれより二歳位は低く見た方がいいとも言える。

ところで、美登利に関し、「過ぎし故郷を出立の当時ないて姉をば送りしこと」（八）、「親子三人が旅衣」（三）などとあり、美登利は両親と共に姉より遅れて上京したことになっている。美登利と大巻との年齢差を五～七歳とし、大巻が十六歳の時に売られ、その後を追うように美登利達が上京したとしても、美登利の上京時の年齢は九歳以上になる。常識的には、十一歳位と設定したい。つまり、美登利は、吉原界隈に住むようになってから、最長でも五年程度、常識的な自然さに従えば、三年位しか経っていないことになる。吉原界隈に生まれ育った他の子供達と、「幼馴染」と言える関係にはない。故前田愛氏のお言葉を借りれば、他の子供達にとって、美登利は「たったひとりのよそもの」[注8]なのである。

しかも、信如との関係に限って言えば、美登利が信如に接近するのは「四月の末つ方」（七）の運動会の時であり、それから三の酉の日まで、僅かに七か月弱の月日しか経っていない。二人の関わりは、七か月弱の間だけのものなのである。「幼馴染」なる語を持ち出すのは、『伊勢物語』第二十三段の色硝子を透して『たけくらべ』を見、『たけくらべ』の実際を歪めているとしか、言いようがない。

確かに、一葉小説の題名の大部分は、和歌的発想、古典的発想によっているであろう。発表作だけに限定しても、『闇桜』に始まって、『別れ霜』『たま襷』『五月雨』『うもれ木』『経づくえ』『暁月夜』『琴の音』『花ごもり』『暗夜』『大つごもり』『軒もる月』『ゆく雲』『にごりえ』『うつせみ』『十三夜』『わかれ道』『裏紫』『われから』――何もそうである。『雪の日』でさえ、古典的発想の付題と考えるべきである。[注9]唯一の例外は『この子』であるが、これとて、未定稿Ⅱでの題表記「此子」を眺めていると、多少は古語的香りがして来る。また、未完成小説断片、作品45「この文」を思い出したりしていると、『堤中納言物語』の「このついで」が連想されて来たりする。しかし、だからと言って、例えば、『にごりえ』や『裏紫』[注10]の場合の如く、題名の典拠を特定の古典作品に求め、その作品を通して題意を導き出してしまっては、それが作品内容の実際から遊離してしまう惧れがある。

故長谷川時雨氏は、『たけくらべ』の題意を、「少年少女たちの身長くらべ、心想のたけくらべ、淡い少年の日の、純真な、初恋の思いのたけ（ママ）という意味もふくめた題名である。」[注11]と解説されたが、これ亦、

『伊勢物語』第二十三段の、贈歌解釈の異説を加味してみたに過ぎないものである。

勿論、「たけくらべ」とは、何はともあれ、まず、〈背丈比べ〉の意である。我々は、とりあえず、次の、森三千代氏の素直な解釈から出発しなければならない。

たけくらべというのは、せいくらべのことで、幼い友だち同士が、どれだけ大きくなったとせいくらべをしながら育っていくという意味です。(注12)

（『少女世界文学全集27　たけくらべ』の「解説」）

「せいくらべ」で勝った子供は、そのことに誇りを感じるのである。負けた子供は、悔やしがり、自分の背丈が、少しでも早く、少しでも高くなるよう、心から願う。この場合、背丈が伸びることは、大人に近づくことである。子供達は、「せいくらべ」で、大人への接近度を競うのである。

『たけくらべ』は、まず（一）章で、この界隈の子供達が、吉原遊廓の影響によって、みな早熟であることを、前提として設定している。「十五六の小癪なるが、酸漿ふくんで此姿はと目をふさぐ人もあるべし、」「これに染まらぬ子供もなし、」「十五の少年がませかた恐ろし、」「教師の苦心さこそと思はるゝ」などとある。女の子に限れば、「娘の子は何処にも貴重がらるゝ頃なれど、此あたりの裏屋より赫奕姫のうまるゝ事其例おほし、」（八）という訳で、親から、早く大人になって「御出世」（八）し、金蔓になることが期待されている。「姉なる人が身売りの当時、鑑定に来たりし楼の主が誘ひにまかせ、此地に活計もとむとて親子三人が旅衣、たち出しは此訳、それより奥は何なれや、」（三）という美登利がまさしくそうなのであるが、これは、子供達自らも願っていることなのである。田辺（伊東）夏子は、次のような一葉の言葉を伝えている。

大音寺前に住んでゐた時「あの辺では玉のやうな性質の女の子が吉原で全盛になるのが、一番の親孝行だと思ふてゐるのよ」と感慨深かさうに、言ふてゐました。

（「一葉の憶ひ出」―『一葉の憶ひ出』）(注13)

これは、まさに美登利そのものである。（八）章に、姉の「今日此頃の全盛に父母への孝養うらやましく」云々とあるが、この事は、未定稿BⅡ3（その六）に、次の如く、更に明瞭に記されている。

姉さんが孝行を見ならふても、やがての出世を心がけてくれと常日頃母が教へ、ヱゝ年のゆかぬが無念な、姉さんに孝行を先へ取られた、我れとても心は誰れにおとるべき、（中略）其時こそは美登利が孝行のし時、父さんには甘き物そへて酒のませ、母さんのほめ詞きゝたや、あゝ年が取たい、孝行がしたいと夢のまもわすれぬはこれ、

正太郎も亦、次の如く、情けない将来像を胸にして、大人願望を強く懐いている。

○己らだつても最少し経てば大人になるのだ、蒲田屋の旦那のやうに角袖外套か何か着てね、祖母さんが仕舞つておく金時計を貰つて、そして指輪

もこしらへて、巻煙草を吸つて、履く物は何が宜からうな、己らは下駄より雪駄が好きだから、三枚裏にして繻珍の鼻緒といふのを履くよ、似合ふだらうかと言へば、（十一）

○馬鹿を言つて居らあ、夫れまでには己らだつて大きく成るさ、此様な小つぽけでは居ないと威張るに、（同）

○正太は独り真面目に成りて、例の目の玉をぐるぐると為せながら、美登利さんは冗談にして居るのだね、誰だつて大人に成らぬ者は無いに、己らの言ふが何故をかしからう、奇麗な嫁さんを貰つて連れて歩るく様に成るのだがなあ、（同）

以上の他にも、美登利、正太郎、それに、小学高等科の生徒であり乍ら、（十三）章では吉原遊廓から朝帰りという長吉の、見様見真似の〈大人ぶり〉は、随所に描かれている。

戸松泉氏は、『たけくらべ』に、「片一方は遊廓、片一方は子供社会のひとつの帰属の場としての学校、という図式」[注14]を設定して居られる。これは、寧ろ、親に代表される吉原界隈の大人社会対学校という対立の図式――それも、大人社会が学校をかなり侵している姿を見るべきだと思うが、兎もあれ、学校は、モラトリアムの一つの、しかし重要な場である。然るに、（五）章で与えられた〈恥辱〉が直接の原因となって、（六）章で美登利は学校をやめてしまう。（七）章に「これより学校へ通ふ事おもしろからず、我まゝの本性あなどられしが口惜しさに、石筆を折り墨をすて、書物も十露盤も入らぬものにして、」云々とあるが、未定稿では、その部分に、更に「あとを慕ふて退校の生徒七八人いづれの親様方も格別こ言は申さぬ如なり。」（補遺Ⅱ）と付け加わっている。信如も亦、末尾で、来年卒業予定の小学高等科を中退し、ここで言う「学校」とは異なる職業学校――「坊さん学校」（十六）[注15]の「何がしの学林」（同）に転じて、父「大和尚」（九）のあとを追う道に入ってしまう。小学高等科に行っていない三五郎や団子屋の背高は、暮らしの為に、既に大人同様の苦労を背負わされている。団子屋の背高の貧しい夢は、「己れは来年から際物屋になつてお金をこしらへるのだから、夫れを持つて買ひに行くのだ」（十四）とあり、小金を溜めて美登利を買いに行くことである。

かかる『たけくらべ』の子供達に、モラトリアムとしての思春期が与えられているであろうか。彼等は、自ら望んで、大人へ、大人へと、それも、親達によって運命的に用意されているみじめな大人へと、直進しているように見える。〈大人への哀れな競い合い〉――これが、「せいくらべ」に重ねられている『たけくらべ』の題意であろう。その意味で、青木一男氏の次の御指摘は、貴重なものを含んでいると思われる。

「たけくらべ」に登場する少年少女の成長は実に速やかであって、まさに成長くらべの観を呈している。（『たけくらべ研究』）[注16]

小学高等科を第四級修了時点（つまり、高等科に進級して半年め）で中退した一葉は、その経緯を、日記に、次の通りに記した。

十二といふとし学校をやめけるがそハ母君の意見にて女子にながく学問をさせなんハ行々の為よろしからず針仕事にても学ばせ家事の見ならひなど

させんとて成き　父君はしかるべからず猶今しばしと争ひ給へり　汝が思ふ処ハ如何にと問ひ給ひしものから猶生れ得てこゝろ弱き身にていづ方にも〳〵定かなることといひ難く死ぬ斗悲しかりしかど学校は止になりけり

（「蘆之中」明26・8・10の後記）

もし、『たけくらべ』に、一葉自身の体験なり、心情なりが移入されているとすれば、それは、一葉の青春が投影しているのではなく、〈青春〉の無かった一葉の哀しみ、早くから戸主として一家を背負わねばならなかった一葉の恨みが、盛り込まれているのである。[注17]

山田有策氏は、「一葉は一足とびに大人にならざるを得なかった己れの生をふりかえっていたに相違ない。」[注18]と述べて居られる。「お職を徹す姉が身の、憂いの愁いの数も知らねば、」（八）という美登利が、「此処志ばらくの怪しき現象」（十六）――初潮を契機に教えられた娼妓の何たるかに衝撃を受けて心に叫ぶ「あゝ嫌や〳〵、大人に成るは嫌やな事、何故此やうに年をば重る、」（十五）[注19]という悲鳴は、モラトリアムを持ち得なかった一葉の声でもあったに違いない。

（注）

1　引用は、樋口家にあった大橋新太郎編『日本文学全書　第一編　竹取物語　伊勢物語　紫式部日記　住吉物語　徒然草』（明23、博文館）所収の萩野由之／落合直文／小中村義象校「伊勢物語」による。

2　塩田良平・和田芳恵・樋口悦編『樋口一葉全集　第二巻』（昭49、筑摩書房）の［補注］（三七五頁、野口碩執筆）に従う。

3　山田有策「作品小事典」の「闇桜」項―田中澄江・円地文子訳『明治の古典3　たけくらべ　にごりえ』（昭56、学研）。

4　前出『樋口一葉　考証と試論』の「『たけくらべ』の趣向」章、二四五頁。

5　斎藤真一『明治吉原細見記』（昭60、河出書房）の「遊女の暮し」、六四頁。

6　前同書、「遊女の年齢」項、一二一頁。

7　加藤秀俊他『追補明治・大正・昭和世相史』（昭47追補、社会思想社）、一四〇頁による。

8　前田愛『樋口一葉の世界』（昭53、平凡社）「子どもたちの時間――『たけくらべ』試論――」章「4」、二七六頁。

9　拙論「一葉『雪の日』論考（上）」―「梅花女子大学文学部紀要20」（昭60・12）参照。

10　『裏紫』の場合については、拙論「『裏紫（上）』ノート」―『梅花女子大学開学二十周年記念論文集』（昭60）参照。

11　長谷川時雨『一葉小説全集　附巻　一葉評釈　一葉評伝』（昭32、宝文館）の「一葉評釈」、七七頁。

12　昭46、偕成社。三一三頁。

13　昭25、潮鳴会。八頁。

14　「共同討議　樋口一葉の作品を読む」（「国文学」昭59・10）での発言。

15　初出の「文学界」第三十七号では、（十五）（十六）が、誤って、重ねて（十三）（十四）となっている。以下、正して表記した。

16　昭47、教育出版センター。「『たけくらべ』鑑賞」章「十六」、四三頁。

17　一葉の戸主相続は数え年十七歳の明治二十一年、父則義の病死はその翌年。

18 前田愛編『全集樋口一葉　第二巻　小説編二』（昭54、小学館）の「たけくらべ」扉裏解説、六頁。

19 〈初店説（水揚説）〉は採らない。「シンポジウム＝『たけくらべ』をめぐって」（「解釈と鑑賞」昭63・2）参照。なお、ついでに記せば、母親の湧かす風呂は、この日の化粧を落とすことを意味している。

三　「雛鶏」という原題

明治二十八年一月三十日付発行「文学界」第二十五号に発表された『たけくらべ』第一回掲載分、（一）～（三）に対応する未定稿に付されている題名「雛鶏」は、『たけくらべ』の原題とされている。この「雛鶏」の題意について、故関氏は、次の如き種々の御解釈を提起された。

① この小説は、はじめ、「雛鶏」と命名された。これは「子どもたち」というくらいのたとえであろう。（『たけくらべ／十三夜要解』）[注1]

② 「雛鶏」という題名は、子どもたちが通っている学校の名が「雛鳳舎」と名づけられていることと見合っているが、（「『たけくらべ』の趣向」―『樋口一葉　考証と試論』）[注2]

③ あるいは、『源氏物語』の婦女童蒙向けのダイジェストに『雛鶴源氏』というのがあったように思うが、それからの連想が働いていたのかも知れない。（前同）

④ あるいは、一葉は花鳥風月の歌人だったからという単純な説明も、まったく無意味ではないかも知れない。（前同）

⑤ 近松半二らの「妹背山婦女庭訓」の可憐なジュリエットである太宰少弐国人の娘「雛鳥」の名がヒントになったのかも知れない。（前同）

⑥ 主人公「美登利」の俤が大きくかぶさっていると見られるかもしれない。（前同）

⑦ 飼育される囚われの身の上が暗示されているのかも知れない。（前同）

明治十四年の藤田吉右衛門編『新吉原細見記』によると、越後屋、品川屋、新福岡屋にそれぞれ「雛鳥」名の娼妓がいる。明治十五年の安田安五郎編『吉原細見』でも、品川屋と新福岡屋に「雛鳥」名の娼妓がいる。明治二十年の竹内斎次郎『吉原細見記』[注3]では、「雛鳥」名の娼妓が、三州楼、品川楼、福岡楼、北越楼、八幡楼のそれぞれにいて、五名に殖えている。「鶏」でなく「鳥」ではあるが、「雛鳥」は、娼妓の、一般的な源氏名として用いられた語なのでもある。そのことが、「雛鶏」という付題と全く無縁であったとも言い切れない。「小雛」[注4]も一般的な源氏名であり、また、「雛鶴」[注5]「雛」[注6]「雛袖」[注7]「雛綾」[注8]「雛菊」[注9]という源氏名も存在する。

ところで、故関氏の御解釈の中では、特に②と⑦とが注目に値する。『たけくらべ』（一）と同様、『雛鶏』も、吉原遊廓に関わって生きている「大音寺前」の貧しい人達の、鷲神社の熊手の内職作りの説明に始まる。「大鳥大明神様」は金銭の神であり、欲望の神である。いわば吉原遊廓の守護神である。その支配下にある住人の子供達の通う私立小学校の名が、『たけくらべ』（一）では「育英舎」に改められるが、『雛鶏』では「雛鳳舎」になっている。「雛鳳」とは〈鳳

（おおとり）の雛〉である。将来「鳳」となるべき子供達、つまり、〈秀レタ子弟[注10]〉の意である。その点、「育英舎」の「育英」の意と、さして相違はない。しかし、一葉は、〈大鳥の神の支配下にある子供達〉の意をも込めて、「雛鳳」の名を用意したのではなかったのか。そして、「雛鳳」はもとより、「雛鳥」ならぬ「雛鶏」なる付題は、美登利を中心とする子供達が、「鳳」どころか、「鶏」にしかなり得ぬ運命を背負わされているということを、表現しようと意図した結果のものではなかったか。〈金銭の非情な論理に縛られ、運命的に、所詮は鶏にしかなれぬ子供達〉の意を、この題に認めたい。尤も、正太郎は、「廓内の大きい楼にも大分の貸付があるらし」（『たけくらべ』(四)）い「質屋のくづれの高利貸」（『雛鶏』第二回）の跡継ぎであり、「公立」（同）の学校へ通っていて、「雛鳳舎」には通っていない。だが、既述の通り、〈情けない将来像〉しか与えられていないという点で、「雛鶏」の例外にはならない。

さて、『雛鶏』から『たけくらべ』への改変は、屢々、写実的傾向から抒情的傾向への、作風の転換として説かれている。例えば、次の通りである。

○「たけくらべ」の方が芸術的価値は高いが、写実性はこの「原型」の方にある。（塩田良平『樋口一葉研究　増補改訂版』[注11]）

○かなり具体的・現実的であった「雛鶏」の世界から、これが抽象し捨象されて、やがて純粋領域として「たけくらべ」の世界が浪漫的抒情的に漸次展開されていったわけであるが、（木村真佐幸『一葉文学成立の背景』[注12]）

故塩田博士の御見解は、『たけくらべ』（四）～（十二）の未定稿断片群をも『雛鶏』と一括して「たけくらべ原型」と名付け、その全てが『たけくらべ』（一）～（三）の第一回発表分に先んじて試作されたと仮定してのものである。木村氏の場合は、「たけくらべ原型」＝『雛鶏』と誤認して居られる。（四）～（十二）の『たけくらべ』未定稿群は、それぞれ、それより前の発表単位部分が定稿として完成した後に試みられたものである。[注13]すなわち、次の通りの制作経過となる。

『雛鶏』→『たけくらべ』（一）～（三）→『たけくらべ』（四）～（六）の未定稿→『たけくらべ』（四）～（六）→『たけくらべ』（七）（八）の未定稿→『たけくらべ』（七）（八）→『たけくらべ』（九）（十）の未定稿→『たけくらべ』（九）（十）→『たけくらべ』（十一）（十二）の未定稿→『たけくらべ』（十一）（十二）→（十三）（十四）→（十五）（十六）

右に、木村氏の仰言る「具体的・現実的」「浪漫的抒情的」という関係を適用すれば、次の通りになる。

具体的・現実的→浪漫的抒情的→具体的・現実的→浪漫的抒情的→具体的・現実的→浪漫的抒情的→具体的・現実的→浪漫的抒情的→具体的・現実的→浪漫的抒情的

この〈変化〉を〈作風の展開〉と捉えるならば、〈具体的・現実的→浪漫的抒情的〉の展開ばかりでなく、〈浪漫的抒情的→具体的・現

実的〉の展開についても、説かねばならぬ。その前に、第一、そのような〈作風〉の激しい繰り返し〈変化〉についての説明が、必要になって来る。

『たけくらべ』の〈未定稿→定稿〉に見られる〈変化〉は、具体的な叙述で草稿を試み、それを定稿化するに際し、暗示的な表現に改変するという、一葉の小説制作過程に見られる一般的傾向として解釈し得る。〈作風〉の転換ではなく、一葉の小説制作の方法・技術に関わる問題である。或るいは、小説観の問題でもある。題名だけについて言えば、「雛鶏」から「たけくらべ」への改変も、その一環として行われたという性質を有し、『にごりえ』に於ける「ものぐるひ」「親ゆづり」[注14]からの改変と、似た事情にある。だからこそ、「雛鶏」の題意は、「たけくらべ」の基本的題意をより具体的に含んでいるものとして、留意しなければならないのである。

尤も、藤井公明氏は、次の通りに述べて居られる。

『たけくらべ』の未定稿に、『雛鶏』がある。（中略）この時の一葉の頭にあった小説の世界は、現在の『たけくらべ』とは、かなりちがったもので、つまり吉原界隈の貧民街や子供たちを、もっと写実的に、もっと市井物的に描くつもりではなかっただろうかと思うのである。

（『樋口一葉研究』[注15]）

しかし、〈未定稿→定稿〉に見られる一葉小説の表現的変化の特性に気付くならば、藤井氏の御指摘の一部は、『雛鶏』と『たけくらべ』との相違として捉えるべき問題ではあるまい。『雛鶏』の完成度が後の未定稿群に比して高いという事情はあるが、中途に四か月、二か月という二度の休載期間を有する[注16]『たけくらべ』そのものの、制作過程に於ける変貌として、改めて検討すべき性質を含んだものであるように思える。そのことを、題名に限って言えば、「雛鶏」の題意から出発した「たけくらべ」の題意は、作の進行につれて、「雛鶏」の題意を土台とし乍らも、それだけでは律しきれぬ題意を含むに至る、ということになる。

（注）

1 前出書、「たけくらべ」編の「解説と鑑賞」章、一〇二頁。

2 前出、二四一頁。以下、⑦まで二四四頁。

3 「序」末に「花柳の文字に縁ある　みどり記」とある。「美登利」名設定理由に関わる内容かも知れない。

4 明14『新吉原細見記』では、泉屋、越河屋、鶴吉屋、藤本屋に、明15『吉原細見』では、小松屋、新越後屋、鶴吉屋、中米屋、福岡屋、藤本屋、平大黒屋に、明20『吉原細見記』では、梅万楼、玉宝来楼、鶴吉楼、松岡楼にいる。

5 明20『吉原細見記』では、杉戸楼、宝楼にいる。

6 明20『吉原細見記』では万年楼にいる。

7 明20『吉原細見記』では越川楼にいる。

8 明15『吉原細見』では越川屋にいる。

9 明15『吉原細見』では八幡屋にいる。

10 小川環樹他編『角／川新字源』（昭43、角川書店）に、「将来有望な子弟のたとえ。すぐれた子弟。」とある。

11　前出書、「第七章　福山町時代」「第三節　光芒燦然」「二、『たけくらべ』の成立」、六二九頁。

12　昭51、桜楓社。「第七章『雛鶏』と『たけくらべ』の位相」「八」、一九七～一九八頁。

13　拙論「『たけくらべ』制作過程考――『たけくらべ』研究稿・第一章――」――「梅花女子大学文学部紀要23」（昭63・12）参照。

14　『にごりえ』未定稿CⅣで試みられた題名。「ものぐるひ」を消し、「親ゆづり」としている。

15　昭56、桜楓社。「明治二十八年の一葉」章の「一　『たけくらべ』（一）（二）（三）」「西鶴の影響」、九頁。

16　（注13）に同じ。

（付記）

1　『たけくらべ』本文の引用は、初出の「文学界」誌によった。他の一葉著述物からの引用は、筑摩書房版『樋口一葉全集』によった。但し、必要に応じて濁点を施した。

2　引用文は、すべて、常用漢字体のある旧漢字は常用漢字体に改めた。

（昭60・12・28稿、昭63・8・17補筆）